

指導資料

美術 第29号

— 中学校対象 —

鹿児島県総合教育センター

平成1年月発行

基礎的能力をはぐくむ美術科の学習指導 ～ スケッチの学習指導を通して～

今、美術科に求められているのは、生徒に美術を愛好していく意欲と喜びをより一層もたせ、個性を生かして創造的に表現したり鑑賞したりしていく主体的な能力の育成である。そのためには、学習したことを、日々の生活の中に生かしていくことができるようになる必要がある。

今回の改訂では、これまで「絵画」と表記されていたものが「絵」と改められている。このことが意味するのは、いわゆる美術作品としての「絵画」を基本としつつ、スケッチや絵手紙、漫画、イラストレーションなどの多様な表現も含め、日常生活で気軽に絵を楽しむながら描き、愛好していく態度を育成するということである。特に、スケッチはすべての表現活動の基礎となるので、3か年を通して継続的に学習し、個性を生かして習熟できるようにすることが求められる。

そこで、本稿では、スケッチの学習指導を通して、基礎的能力をはぐくむ美術科の学習指導はどうあればよいか、その在り方について述べる。

1 美術科ではぐくむ表現の基礎的能力

学習指導要領解説の「A表現」における基礎的能力は、次のとおりである。

- (1) ものの見方・感じ方を深めること
- (2) 主題や発想を創出すること
- (3) 考えやイメージをまとめ組み立てること
- (4) 形・色・材料で表す感覚や基礎的技能を身に付けること
- (5) 創意工夫して、よりよく表すこと
- (6) 全過程を通して自己確認すること
- (7) 作品を通してコミュニケーションや批評をし合い、互いのよさや個性などを理解し合うこと
- (8) 自分の作品に愛着をもち、大切にすること

これらの基礎的能力は、それぞれに独立したものや順序性として身に付けるものではなく、鑑賞とかかわり一連のものとして総合的に行きつ戻りつしながら身に付けていくものである。

2 スケッチと基礎的能力との関連

(1) スケッチをどうとらえるか

スケッチとは、制作をするための表現の構想に必要な下描き、または、準備のための簡単な絵、メモとしての簡単な絵のことである。

スケッチは必ずしも正確さを競うものではなく、デッサンよりも軽いイメージをもつことが必要である。自分が感じたことや考えたこと、見たことなどをおおよそ分かるように、それらしく描くという程度に考えてよい。

(2) スケッチ学習の意義

冒頭に述べたとおり、スケッチは美術のあらゆる表現活動の基礎となるものであるとともに、生涯学習の観点から絵を楽しむための基礎となるものでもある。また、美術以外にも全教科及び総合的な学習の時間等、さらには、日常生活の様々な場面でのアイデアスケッチや文書に加える簡単な絵やカット、自分の考えを図で説明発表するなどの表現技能として生活全般において生かすことができる。

(3) スケッチではぐくむ基礎的能力

スケッチの基礎的技能を身に付けることにより、表現における様々な基礎的能力をはぐくむことができる。

例えば、自然や人物、感動や印象、形象などを描いたり、想像したことを描いたりして、絵として描くことを楽しみながら、ものの見方・感じ方を深めることができる。また、見たことや思いついたアイデアなどの絵によるメモ、プレゼンテーションとしてのスケッチなど、生徒自らが創意工夫する活動の中で、よりよく表す力や自ら課題解決の方法を考える力などをはぐくむこともできる。さらに、お互いの作品を認め合う中で、作品に対して愛着をもったり、よさや個性を理解し合ったりする能力などもはぐくむことができる。

3 スケッチの指導内容

各学年における指導内容は、次のとおりである。

(1) 第1学年におけるスケッチ

自然や身近なものを観察し、形や色彩の特徴や美しさなどをとらえスケッチをすること。

第1学年では、自然や人物、動植物、身近にあるものなどを観察し、その形や色の特徴や印象を大切にしておいてスケッチする必要がある。



【生徒の作品】

なお、「美しさなど」とは、自然の対象の美しさ、造形的なおもしろさ、情緒、生命観やものの存在感、美の感動や不思議さなどである。

(2) 第2・3学年におけるスケッチ

対象を深く見つめ感じ取ったこと、考えたこと、夢、想像や感情など心の世界をスケッチに表すこと。

第2・3学年で扱う対象としては、第1学年における自然をはじめとする身近な事物に加え、自己の内面や社会の様相なども含んでいる。そのような対象や自己の内面等を一層深く観察し、対象から受けた印象や感情、夢や想像の世界などをスケッチする能力を育てるとともに、表現する喜びを味わわせることを目指している。

4 スケッチの指導上の留意点

スケッチの指導を進めるに当たり、次のようなことに留意したい。

(1) 個に応じた指導をする

絵が描けるようになりたいという願いを実現していくためには、生徒がスケッチの仕方などを自分のよさを生かして主体的に身に付けていけるよう指導していく必要がある。その指導は、単に教師のもつ技術を教え、習熟させるやり方だけでなく、スケッチに関するいろいろな描画材や技法を教え、そこから生徒が興味関心や学習意欲をもてるようにすることが大切である。

(2) 観察することを重視して指導する

観察するということとは、自然や動植物、人物など形あるものをそっくりに表示するために行うものだけではない。対象に直にかかわらせ

写 真 1

たり、自分の目や【手をスケッチする生徒】手で見たり触ったりして表現力を身に付けさせるようにすることが大切である。

(3) スケッチのコツを指導する

ただ単に対象を見て描いていることの繰り返しでは、習熟するのに長時間を要するので、そのコツをいろいろな表現学習の過程において適切な機会をとらえて、やって見せながら理解させる必要がある。

スケッチのコツを大まかにまとめると次のようになるが、コツはヒントの一つとして教えたい。ここに示すのは、一般的で生徒に理解されやすいコツである。

ア 形をとらえるときは、片方の目を閉じて見た方がとらえやすい。

イ 空間感、距離感は両目を見開いた方がとらえやすい。

ウ 太い芯の鉛筆で描くようにする。

エ 風景や静物は、手前の基準になる物の形、大きさを先に描くようにする。

オ 明暗の調子は、目を徐々に細めて見るととらえやすい。

カ 人物を描くときには、頭身を鉛筆で測りながら描くようにする。

(4) 立体スケッチについても指導する

スケッチというどうしても平面での表現が中心になるが、形の特徴をおおまかにとらえる練習のためには、立体スケッチも効果的である。粘土によるスケッチにも、ぜひ取り組ませたい。

(5) 継続的に指導する

スケッチの能力を向上させるには、見ることと描くことの学習を継続的に行い、表現の感覚を実際に体で覚えさせ、見たことと手の動きを一体化させていく必要がある。したがって、時間をかけて長く描かせることばかりでなく、年間を通じた授業の中で、短時間でも継続的に指導するようにする。またその際、小さな紙面でスケッチを繰り返し描くという活動は、効果的であると考えられる。

5 基礎的能力をはぐくむスケッチの指導例

日頃の授業の中に、わずか5分間ではあるが、スケッチの活動を取り入れることにより、その技能が高まるとともに、各題材の目標を今以上に達成することができるものとする。このことが、美術科における

基礎的能力をはぐくむことにつながる。

ここで紹介する指導例は、授業の最初の5分間程度をスケッチの時間として設定し、年間を通してスケッチの技能を高めようとするものである。実際の指導に当たっては、創意工夫しながら、根気強く取り組んでいただきたい。

「5分間スケッチ」の指導例

指導過程	時間	主な学習活動	指導上の留意点
スケッチ	5	1 5分間スケッチ モチーフ「手」 描画材料：鉛筆	自分の手をモチ-フとして、一番好きなポーズをつくって描くよう助言する。 大きさ、線の描き方等について、参考作品をもとに説明する。 ・対象をよく見て描く。 ・対象から受ける印象を大切にす。 参考作品は、生徒の作品も含め、多種多様なものを掲示するようにする。 ものをよく見取る力、気付き発見する力などの基礎的能力のはぐくみ

年間を通したモチーフ例

月	モチーフ例	スケッチを通して身に付けさせたい能力	描画材料例
4月	立方体、鉛筆、消し	ごく単純な形や直線の形体のものを見て、だいたいそれらしく表すことができる。	鉛筆 コンテ フェルトペン ボールペン 竹ペンなど 生徒が用意できないものは、教師が用意する。
5月	ゴムなど		
6月	円筒、テニスボール	直線的形体や簡単な曲線的形体のものを見て、だいたいそれらしく表すことができる。	
7月	など		
9月	自分の手、葉っぱ	見たものや考えたことのおおまかな特徴をとらえて、それらしく表すことができる。	
10月	ど		
11月	机、いす、木、友達		
12月	の顔など		
1月	いすに腰掛ける友達	見たものや考えたことの特徴や陰影、立体感、全体の感じなどをとらえて、それらしく表すことができる。	
2月	や先生		
3月	花びんなど		

6 美術科の学習指導の充実を目指して

多くの生徒は、美術の時間に「形や色が思い通りに表現できる技術を教えてほしい」という思いや願いをもっている。このような実態を考えたとき、生徒に絵を描くことの楽しさを味わわせ、表現意図を実現する方法を身に付けさせることは、美術教師に最も求められていることではないだろうか。

私たちは、生徒の思いや願いを真摯に受け止め、基礎的能力をはぐくむ美術科の学習指導を目指し、日々の授業の充実に向け、精一杯努力を重ねていかなければならない。

〔参考文献〕

文部省『中学校学習指導要領解説 美術編』平成11年 開隆堂

著者 遠藤 友麗 『新中学校教育課程講座(美術)』平成12年 きょうせい

(第三研修室)